

夏休みの終り、そして秋の到来*(LA FIN DES VACANCES D' ETE et L' ARRIVEE DE L' AUTOMNE)**

今夏は“酷暑”(la canicule)に襲われることもなく、割合に過ごし易いと思っていましたら、いつの間にやら夏を懐かしむような空、日の出が次第に遅くなって、朝が暗いように感じます。そう云えば、東の空が明るくなる前から賑やかに啼き出し、日中は、あちらこちらの高い所で胸を張って、日が沈むまで、綺麗な声でメロディを歌っていたメルル(le merle クロウタドリ)



の声がチイとも聞こえなくなりました。デンマークに長く住む友人が「立秋を迎えた途端にメルルが啼かなくなる。」と云ってましたが本当です。春一番に芽を吹く柳(le saule)が黄色く、マロニエ(le marronnier)は茶色に枯葉が進んで、カサカサと風に乾いた音を立て始めました。マーリーの森(Forêt de Marly-le-Roi)を抜けましたら、土手にヒース(la bruyère)が咲いて、明るい紫色の模様を描き、栗の木(le châtaignier)が一杯に実をつけていました。何年か前の事、日本で忙しくしている友人が出張でやって来た折、ムードンの森(Forêt de Meudon)に栗拾いに誘いましたら、木を揺すって、まるで小さな子供の様に喜んでいた姿を懐かしく思い出しました。9月2日から始まる新学期(la rentrée)を前に、スーパーの文房具売り場が賑わいましたが、これに対抗して通学鞆(le cartable)8ユーロ(日本円で1000円位)、ノート(le cahier)は1ユーロ均一、分度器(le rapporteur)、コンパス(le compas)等は0,50ユーロ、鉛筆(le crayon)はどれも0,10ユーロ、といった安売りの店も現れました。9月に入るや街には沢山の観光客に替って休暇から戻ったフランス人達が、日焼けした肌も自慢げに、でも「ああ、また仕事かァ、、、」という顔つきで行き交い、電車のダイヤも元通り、駅頭で無料新聞の配布も再開され、各種の展示会も一斉に始まります。ヴァカンスでガランとしていた朝市も賑わいを取り戻し、八百屋には色とりどりの果物が並んでいます。黄色く小粒のミラベル(la mirabelle) (スモモの一種・1kg=2,50euros位)、洋梨の“ギュヨ”(la poire « Guyot » ・1kg=2,00euros前後)、大粒の葡萄“イタリア”(le raisin « Italia » ・1kg=2,00euros位)、シャラントのメロン(le melon charentais ・1個 1,50から 1,00 euros)等々、これからもっと種類も豊富に美味しい秋の味覚が揃うことでしょう。“猛暑日”、“真夏日”、“脱水症”などの言葉に、日本の夏を想いましたが、そろそろ涼しさを感じる頃でしょうか。“夏ばて”が尾を引かぬ様願っています。

*美術館の年中無休案 (LES MUSEES POURRAIENT OUVRIR 7 JOURS SUR 7)

ギリシャ彫刻の傑作“サモトラケのニケ”(Victoire de Samothrace)が130年振りに大掛かりな修復が為されて話題となったルーヴル美術館に、この夏東京から来た友人に請われて久しぶりに“モナリザ”(la Joconde)に会いに出掛けました。昼近くでしたが、入場者の行列が、ガラスのピラミッドの入り口から幾重ものジグザグとなって続き、尻尾が何処なのかを辿るのに苦労しました。とにかく並んで暫く様子を見ましたが、これでは2時間以上も待たなければならない様ですし、その日は陽光が強くて暑く、それこそ熱中症にでもなってはいけなないと、入場を諦め、翌日に早朝から並んで入りました。パリへ来る人の主な目的は“文化”であり(la motivation principale des gens qui viennent à Paris, c'est la culture)、昨年の記録によれば、トップはノートルダム大聖堂で1400万人が訪れ、ルーヴル美術館の入場者数は920万人、ヴェルサイユ宮が700万人、エッフェル塔は670万人、オルセー美術館が350万人、、、となっていますが、せっかく遠路はるばるやって来たのに入れなかったり、やっと入れても中が混雑していて、思うように鑑賞出来ない等の苦情も多く上がっている事と、同時に増収を図る為に、ロンドンやニューヨークの様に年中無休とする案が、今になってやっと検討されています。当初はルーヴル、オルセー、ヴェルサイユから

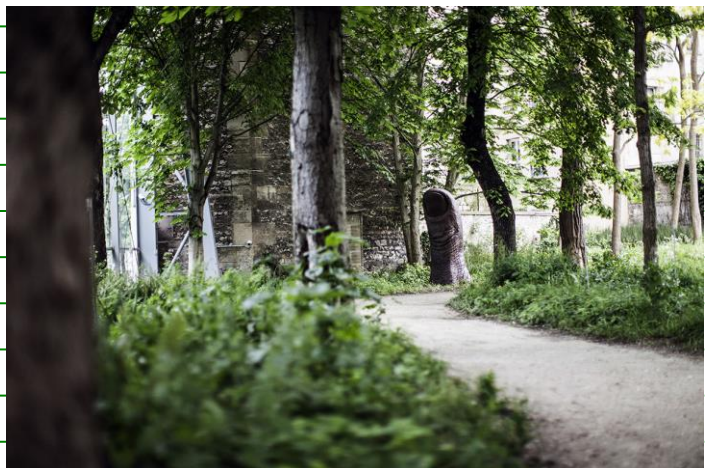
実施を予定
していますが、既に労働組合が反対して騒いでいるようです。



© Atout France/Nathalie Baetens

*カルチエ財団 30年記念「現代美術傑作展」(Expo. « MEMOIRES VIVES » - 30ans de stars de l'art contemporain)

パリのアラブ学院やブランリー美術館等の建物を手掛けた建築家のジャン・ヌーヴェル(Jean Nouvel)の設計になるガラスの殿堂のカルチエ財団では、創設30年の記念に、今迄に催行した展覧会の中から5人のアーティスト、セザール(Césaire)の彫刻“親指”(le pouce)、オーストラリアのロン・ムーク(Ron Mueck)の彫像“大女”(la géante)、現代アフリカ絵画を代表するシェリ・サンバ(Chéri Samba)のナイーヴな世界地図、ムービウス(Moebius)のクロッキー帖、オーストラリアのマーク・ニューソン(Marc Newson)のデザインになる“ケルヴィン40”(Kervin 40)と名付けた、決して飛んだことのない2人乗りジェット機、等々、超大作(les oeuvres les plus spectaculaires)を展示しています。9月21日迄、La Fondation Cartier,(261,boulevard Raspail,Paris 14e, Métro Raspail 下車)にて、月曜日を除く毎日11時から20時迄、入場料10,50ユーロ、13才未満無料です。



***末期患者にワインを**

(OFFRIR LE PLAISIR D' UN BON VERRE AUX MALADES EN FIN DE VIE)



CHU CENTRE HOSPITALIER CLERMONT-FERRAND
Conférence grand public
A-t-on le droit de faire plaisir et de se faire plaisir en fin de vie ?
Plaidoyer pour les vins et la nourriture en Soins Palliatifs
Avec :
Catherine Le Grand-Sébillé Socio-anthropologue, Enseignant-chercheur
Docteur Virginie Guastella, Chef de Service du Centre de Soins Palliatifs
Animé par :
Éric ROUX, journaliste culinaire
Le 9 septembre à 18h45
Salle n°3 de la Faculté dentaire



クレルモン・フェラン大学病院の緩和療法センター主任 V・ガステラ 医師 (Dr. Virginie Guastella, chef de service de soins palliatifs du CHU de Clermont- Ferrand) は、癌に冒されて強い痛みにしんどり、不安から気分が落ち込んだりする末期の患者の心身の苦痛を取り去る、或いは和らげるのが緩和ケアの目的であるから、時には家族も交え、一時的にも普段の生活と人間らしさを取り戻し、患者を元気付けるためには一杯のワインが大いに役立つ、との臨床実験の結果を発表、早速病棟にワイン倉とバーを新設、ワインやシャンパンを揃えたそうです。私は昨年 2 人の親しい友人を癌で亡くしましたが、その中の 1 人は 2 年半の間、診察、検査、治療、入退院など毎日の様に付き添い、普段と変わらぬ態度で話し相手を務めて“緩和ケア”の一部に役立ったのでは、と思っていますが、何か美味しいものを飲ませたい、食べさせたいと何度思ったことでしょうか。でも彼は放射線治療の結果でしょうか、すっかり味覚を失ってしまいました。亡くなる 2、3 日前でしたか、マンゴが食べたい、と珍しく彼から云われ、大きくてよく熟れたものを買って来て出したら、美味しい、美味しい、と喜んでいるようでしたが、冷たくてツルツルと喉を通りやすかったのが気持ちよく、又こちらを喜ばせようと味を思い出して「美味しい」と云っているのがよく判りました。